

雑誌「日本庭球」の発刊（昭和17年11月） に関する歴史的考察

後 藤 光 将

目 次

1. はじめに
2. 戦時下の出版体制
3. 両誌の棲み分けの崩壊
 - 3-1. テニスボール配給制度の開始
 - 3-2. 軍国主義論調の増加
4. 両誌の統合
 - 4-1. 統合に向けた動きの胎動
 - 4-2. テニスボール用の生ゴム配給割当量の激減
 - 4-3. 編集長樺山義雄の大日本体育会への移籍
 - 4-4. 昭和17（1942）年9月中旬の話し合い
 - 4-5. 新雑誌の形式
5. おわりに

1. はじめに

雑誌「ローンテニス」は、針重敬喜が主筆として、大正14（1925）年4月に日本で初めての本格的なテニス専門月刊誌として創刊された。針重は、早稲田大学卒業後、読売新聞社、東京日日新聞社の記者を経て、明治45（1912）年、押川春浪に請われて飛田穂洲と共に武侠世界社に入社した。大正3（1914）年に押川が病死してからは、実質的に社主を務めていた。大正



図1 「ローンテニス」創刊号 (T14.4) 表紙

12 (1923) 年に武侠世界社を退職し、以後は、「ローンテニス」の発行、および日本庭球協会の理事・顧問などを務めるなど、テニスの普及・発展に全力を注ぐこととなった。雑誌「ローンテニス」は、ローンテニス社という発行所から刊行された。同社の所在は、針重の自宅内にあり、いわば「ローンテニス」は針重による自費出版物というかたちで刊行され始めたといえる。とはいえ、同社の発起賛同人には、当時のテニス関係者を中心に 32 名（針重含む）を集めた。同誌は、比較的多くの写真を用いて速報性の高い試合記事を網羅的に報じることを強みとした。

雑誌「テニスファン」は、夏目漱石の娘婿として知られる作家・松岡譲を編集主幹に昭和 8 (1933) 年 10 月に創刊された。同誌は、初の本格的なテニス専門誌であった「ローンテニス」とは異なる編集方針と誌面構成を採っていた。トーナメントなどの試合結果を網羅的に報じるよりも、テニスの歴史や国際的な有名選手の紹介などの「読みもの」を前面に押し出すという特徴であった。創刊三号（昭和 8 年 12 月）からは巻頭の扉に 6 つのスローガンが掲げられたが、その筆頭には「スポーツと文学との握手」という文言が

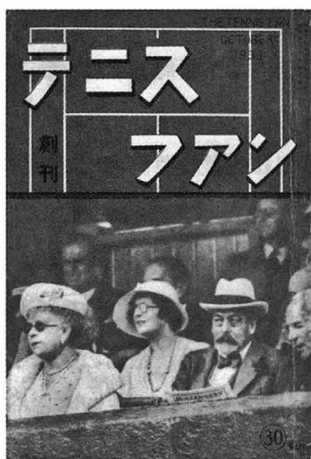


図2 「テニスファン」創刊号
(S8.10) 表紙



図3 「日本庭球」創刊号
(S17.11) 表紙

置かれた。テニスをめぐる「読みもの」が同誌のセールスポイントとして明確に位置づけられている¹⁾。

「ローンテニス」と「テニスファン」は、同じテニス月刊誌でありながらも、このようなそれぞれの特性から、読者層の棲み分けがなされ、読者獲得のための競合も少なく共栄していたと思われる。そのため、両誌ともテニス専門誌として比較的永く親しまれた。しかしながら、両誌とも戦時体制下の昭和17(1942)年10月号を以て終刊した。そして、翌月から両誌を統合する後継誌として「日本庭球」が刊行されることになった。

本研究では、月刊誌「ローンテニス」および「テニスファン」が統合され、「日本庭球」が刊行されることになった背景および経緯を関係資料から読み取り、その歴史的意味を考察することを目的とした。

2. 戦時下の出版体制

まず、「日本庭球」が刊行されることになった戦時下の我が国の出版体制

の変遷について確認する。

戦時下の出版体制に関与した主な機関は、「内閣情報局」、「社団法人日本出版協会」、「日本出版配給株式会社」であった²⁾。

内閣情報局は、昭和 15 (1940) 年 12 月 6 日に設置され、内閣総理大臣の管理下に属し、国家的情報・宣伝活動の一元化および言論・報道に対する指導と取り締まりを遂行した。

社団法人日本出版協会は、日本雑誌協会・東京出版協会等の出版関係諸団体を糾合して昭和 15 年 12 月 19 日に設立された。内閣情報局の監督下で出版統制の実施機関として機能し、昭和 18 (1943) 年には、出版事業令に基づく「特殊法人日本出版会」として改組された。会長その他の役員は官選、機関決定事項は主務官庁の許可無しには効力を発生できなかったことから、事実上内閣情報局の下位機関としての位置づけであった。

日本出版配給株式会社は、全国の出版物取次業者を統合して昭和 16 (1941) 年 5 月 5 日に設立され、日本出版文化協会（日本出版会）の指導のもと、協会員が発行する全書籍雑誌の一元的配給を行った。

内閣情報局が主導して展開された戦時下の出版統制は、(1)検閲当局の編集者との「懇談」・協力の要請からはじまり、編集方針への指示、編集内容への警告、事前検閲、官製原稿の掲載や特定テーマの採択強要、掲載差し止、執筆禁止、発行許可制、編集陣への容喙、編集者から執筆者の検挙にまでおよんだ編集過程への干渉、(2)発行されたものの検閲、記事削除、発売禁止、編集者・執筆者の起訴、さらに(3)用紙割当権を握ることによっての物的条件からの圧迫、そしてついには、(4)戦時企業整備の名による出版社そのものの統合整理・解体、雑誌の改廃・統合、直接政治力の発動による出版社の廃業強要、など各種の方面から狡猾かつ強力に実施され、言論の弾圧から圧殺にまで進んでいった。そしてその全過程を通じて、情報局は「思想戦の参謀本部」として、出版文化協会（のちの日本出版会）は「現地軍の司令部」（いづれも奥村情報局次長のことば）として働いたのである³⁾。

3. 両誌の棲み分けの崩壊

3-1. テニスボール配給制度の開始

昭和13(1938)年7月9日にゴム配給統制規則(商工省令第55号)が公布されて以後、我が国ではテニスボールの新規製造ができない状況となった。そこで、日本庭球協会の岡田正一理事が主任となり、商工省、厚生省の両省に陳情、折衝を続けた結果、同年9月上旬には0.75トンの硬式テニスボール製造用生ゴムの使用許可を得た。日本庭球協会は、この生ゴムを大沢商会(セントジェームス)、桑沢ゴム株式会社(丸菱)、三田土ゴム製造株式会社(三田土)、富士ボール製作所(富士)の4つの製造会社(ボール銘柄)に前年の製造高に比例して分配して、計2,050ダースのボールを製造させた。協会は、この数量分の購買券を発行し、クラブ、会社、学校等に配布した。このように時局の悪化に伴い、テニスボールの配給制が開始され、以後昭和19(1944)年まで続いた。テニスボール配給制の開始は、必然的にトーナメントなどのテニス試合数の減少につながった。

このことは、両テニス雑誌に大きな影響を与えることになった。各種トーナメントの速報性の高い記事を得意としていた「ローンテニス」は取材対象大会が減少した。テニスに関するエッセイを得意としていた「テニスファン」にとっても、様々なエピソードが生まれる重要な場であるテニス試合そのものが減少した。

3-2. 軍国主義論調の増加

そして、軍国主義の時勢を反映するかのように、国体思想の護持や皇民化運動に迎合する論調が増加していった。もちろん、これは内閣情報局を中心とした出版統制の影響も受けていると思われる。

「我等は常に、上御一人に對し奉り忠誠を盡し、國家の爲めに死を賭して奮闘しなければならない。戦線にあると銃後にあるとの間決して差違あるべきではない只其現れ方に相違があるのみである。

ラケットを振り白球を追ふのも、我等は常に其心を以て心とし、第一線に立つても、誰れにも劣らない働きをする爲めに、身心を鍛錬するものである。此覺悟、此心得さへあれば白線の上に立つのも、決して恥かしい事ではないのだ。

我等は常に此覺悟の上に運動競技に親しみ、そして心身をいやが上にも訓練させなければならない。」⁴⁾

その結果、「ローンテニス」と「テニスファン」が本来有していた特徴が薄れ、両誌のそれぞれのオリジナリティも次第に減少していった。この傾向も両誌の統合に向けた動きに少なからず影響を与えたと考えられる。

4. 両誌の統合

4-1. 統合に向けた動きの胎動

「テニスファン」の主幹を担っていた田中純は、昭和16（1941）年頃から「ローンテニス」との合併を「ローンテニス」の主筆の針重敬喜に打診していた⁵⁾。昭和16年からは直接に雑誌の統合改廃が要請され、昭和18（1943）年からは出版社そのものの統合改廃が強行された⁶⁾という出版統制の社会的背景が強く影響したと考えられる。また、日本テニス界において、昭和13（1938）年からテニスボールが配給制になったこと⁷⁾や、昭和16年には全日本庭球選手権大会、全日本学生庭球大会などの主要大会が開催されなかったことも両誌統合へと向かわせたと思われる。このように戦時色がより鮮明に感じられるようになるにつれ、日本テニス界にも所々にそれらの影響を受けたのであった。その影響の一つとして両テニス専門誌の統合に向けた動きが

現実味を帯びてくるのであった。

4-2. テニスボール用の生ゴム配給割当量の激減

昭和 13 (1938) 年 9 月から開始された日本庭球協会によるテニスボール配給制度は、昭和 17 (1942) 年に同協会が解散され大日本体育会庭球部会に衣替えした後も重要な事業として継承された。ボール配分量の基準は、活動組織の種類、コート所持数によって決められており、昭和 17 年度までは比較的安定したボール数を配給できていた。しかし、昭和 18 (1943) 年に入ると極端に配給量が減り、各支部・クラブの最低限要求数を明らかに下回

表 1 戦中期の日本におけるテニスボールの配給量

No.	年度	回数	年 月	配給数 (dz.)
1	S 13 年度	第 1 回	S 13 年 9 月	2,050
2	S 14 年度	第 1 回	不明	1,556
3		第 2 回	不明	4,017
4		第 3 回	不明	4,132
5		第 4 回	不明	4,131
6		第 5 回	S 14 年 2 月	2,178
7	S 15 年度	第 1 回	S 15 年 7 月	1,823
8		第 2 回	S 15 年 8 月	2,454
9		第 3 回	S 15 年 10-11 月	2,454
10		第 4,5 回	S 16 年 2 月	2,300
11		第 6 回	S 16 年 5 月	2,317
12	S 16 年度	第 1 回	不明	2,072
13		第 2 回	S 16 年 10-11 月	2,790
14		第 3 回	S 16 年 12 月	2,110
15	S 17 年度	第 1 回	S 17 年 3 月	2,700
16		第 2 回	S 17 年 6-7 月	2,800
17		第 3 回	S 17 年 10-11 月	2,508
18		第 4 回	S 18 年 1-2 月	1,170
19	S 18 年度	第 1 回	S 18 年 7 月	1,059
20		第 2 回	S 18 年 11 月	916.5
21		第 3 回	S 19 年 2 月	473.5

るようになった⁸⁾。(表 1 参照) 昭和 15 年度から昭和 17 年度第 3 回配給(昭和 17 年 10～11 月)までは平均して約 2,500 ダースの配給量であったにも拘わらず、昭和 18 年第 1 回配給(昭和 18 年 1～2 月)では 1,170 ダースにまで急減した。このことから、昭和 17 年末から日本テニス界は、資源不足の影響を痛切に感じとっていたと思われる。時期を同じくして「ローンテニス」と「テニスファン」が統合され「日本庭球」が刊行されたことにも少なからず影響を与えたと考えられる。

4-3. 編集長樺山義雄の大日本体育会への移籍

昭和 17 (1942) 年 4 月 8 日に大日本体育会が設立されたことにより、国内競技団体は漸次解散して、大日本体育会の一部会として再スタートすることとなった。日本庭球協会の場合は、昭和 17 年 11 月 29 日の解散記念会を以て解散して、全ての業務および財産は大日本体育会庭球部会に引き継がれることとなった⁹⁾。

「テニスファン」は、発刊当初は松岡譲が様々な業務を取り仕切っていたが、定期刊行の軌道に乗り始めた 2 年目から樺山義雄に漸次編集長の役割を移譲していった¹⁰⁾。そして、昭和 12 (1937) 年 3 月号からは樺山が正式に編集長となり、そのサポート役として田中純が主幹となった¹¹⁾。ところが、編集長として「テニスファン」の経営を担っていた樺山は、昭和 17 (1942) 年 10 月 1 日より大日本体育会の参事への就任が急遽決まった¹²⁾。

4-4. 昭和 17 (1942) 年 9 月中旬の話し合い

大日本体育会参事は常勤職であったため、樺山不在となる「テニスファン」は、継続して刊行することが困難になった。そして、両誌統合がトントン拍子に進んでいった。

「東日の壮年庭球試合の際、田中君に會つたら、今度テニス・フハンの

事実上の経営者樺山君が大日本體育會の参事として同會に入る事となつたに就て、テニス・フハンを無條件で引き渡すから一所にやつてくれな
いかと云ふ話である。さうアツサリ出られると、私も亦捨て置く可きで
はないと思つたので、福田君其他一二のローン・テニスの後援者に對し
て相談したのであつたが、常にテニス道に精進して居られる人々とて、
さう云ふ事なら一所になつた方が宜しいと云ふ事に一決した。其所で翌
日返答を約束した東晃社に田中君を訪ねたのであつたが、樺山君一人で
田中君は約束の時間になつても仲々顔を見せない。何うしたんだらう、
昨日あんなに堅く約束したのに、たしか昨日の試合三マツチもやつて最
後はセット・オールで棄權した位だから、ヘタバつてしまつたのかも知
れないなどと、雑談の裡に大體合併承諾の事を樺山君に托して歸つて來
た。

其翌日田中君から電話があつたさうだが、今度は私の方が留守で要領
を得なかつた。三日目の夕方東晃社を訪問して田中、樺山兩君と會見、
僅に三十分にして合併の議が成立した。勿論無條件である。無條件と云
つても、從來多數の愛讀社諸君、殊に直接購賣料を拂つて後援して居つ
て下さつた方々には、決して迷惑をかけないと云ふ事は、之れこそ双方
の一致した意見である。」¹³⁾

ここで言う「東日の壮年庭球試合」とは、東京日日新聞社主催壮年庭球トー
ナメント（現在の毎日テニストーナメント ベテランの部）のことである。
昭和 17（1942）年の同大会は、9月 12 日から 16 日まで早稲田大学コートで
開催された。そのため、この期日のうちの何れかの日に田中純から針重敬喜
に打診があり、その 3 日後の 30 分程度の話し合いで合併が正式に決まった
のであった。つまり、9月 15 日から 19 日の間に話しがまとまり、翌月の 10
月号がそれぞれ終刊号となり、11 月号から新たな合併雑誌が刊行されるこ
とになった。約 1 ヶ月半という非常に短期間で合併雑誌の刊行準備がなされ

たのであった。

4-5. 新雑誌の形式

「ローンテニス」の針重敬喜は、新雑誌のタイトルは新しくするべきとの考えのもと「日本の庭球」という案を考えた。および大きさもこれまでは「ローンテニス」は A4 版、「テニスファン」はひとまわり小さい A5 版であったが、大きさについては「テニスファン」と同じく A5 版にするという案を考えた。これらの案を樺山義雄、田中純に提示したところ、両方とも快諾したため、この段階ではこの形式で決定した。

「日本の庭球」というタイトル変更については、「テニス・フハンもさうであるが、ローン・テニスと云ふ題名も呼び慣れて来た今、必ずしも敵性のものであるとも思はれないが、底に何だか、引かかゝるものがある」¹⁴⁾と針重が述べている。大日本体育会が主導となる全面的なスポーツ用語の邦語化政策が展開されるのは、翌年の昭和 18（1943）年 3 月からである¹⁵⁾。しかしながら、針重は、新雑誌のタイトルには「テニス」よりも「庭球」が相応しいという考えを持っていたことが窺える。「必ずしも敵性のものであるとも思はれない」と言っているものの、明らかにスポーツ用語の邦語化の一連の流れに位置づけられ、当時の我が国の社会的背景が強く影響していると思われる。発案当初は「日本の庭球」であったが、実際のタイトルは「日本庭球」となった。大きさについても、各雑誌に割り当てられる用紙の枚数が漸次減少していくなか、「テニスファン」と同じ小さいものを採用したことも時局に対応して判断されたものと思われる。

5. おわりに

戦前・戦中期にテニス専門月刊誌として「ローンテニス」、「テニスファン」の両誌が統合され「日本庭球」となった経緯を検討した結果次のようなこと

が明らかとなった。

1) 昭和 13 (1938) 年より資源不足のためテニスボール配給制度が開始され試合数が減少して両誌の内容の特徴の差異が曖昧になってきていたという背景のもと、2) 「テニスファン」を主宰していた樺山義雄が、大日本体育会の参事に就任することになったため、編集業務の継続が困難になったことを直接的契機として、3) 当時のスポーツ界で浸透しつつあった各種用語の邦語化の流れをくみ取り、4) 政府の意向として様々な関係団体、書籍、雑誌の再編を行っていた国策的な背景のもと、両誌の統合がなされたのであった。

これは、ひとつの要因に引きずられた結果ではなく、重層的に存在した複数の背景による帰結であったといえよう。しかしながら、戦時体制下というキーワードが、これらの背景の共通項ともいえる。

昭和 17 (1942) 年 11 月に刊行された「日本庭球」は、翌年末の昭和 18 年 (1943) 12 月を以て廃刊した。針重は、廃刊理由として、「潔く國家の命ずる所に従つて快く國策に準應する」⁶⁾ ためとしている。つまり、戦局が深刻化するにつれて数多くの雑誌が廃刊されたように、「日本庭球」も同じ運命を辿った。用紙割当統制の影響で最終号の前号は、「紙が無くては仕方が無い」ということで 10・11 月合併号として刊行された。さらに最終号は、僅か 32 頁であり、最盛期の三分の一程度の頁数であった。

《註》

- 1) 疋田雅昭・日高佳紀・日比嘉高 (2009) 『スポーツする文学 1920-30 年代の文化詩学』青弓社、161-162 頁。
- 2) 国立国会図書館 (編) (2005) 『戦時下の出版』(第 135 回常設展示資料)、3 頁。
- 3) 法政大学大原社会問題研究所 (編) (1965) 『太平洋戦争下の労働運動』労働旬報社、176-187 頁。
- 4) 針重敬喜 (1942) 「我等は常に」、『ローンテニス』第 18 巻 8 月号、1 頁。
- 5) 針重敬喜 (1942) 「テニス雑誌の統一」、『ローンテニス』第 18 巻第 10 月号、2 頁。
- 6) 前掲 3), 185 頁。

- 7) 後藤光将（2013）「戦中期の日本におけるテニスボールの配給に関する研究」、『明治大学教養論集』494 号，14 頁。
- 8) 同上書，37-38 頁。
- 9) 日本庭球協會（舊）編（1944）『日本庭球協會史』，日本庭球協會（舊），3 頁。
- 10) 『テニスファン』の編集後記の著者は，創刊号から 1934 年 9 月号までは松岡譲，1934 年 10 月号から 1942 年 10 月号（終刊号）は樺山義雄であった。つまり，刊行当初から松岡は自らの後継として樺山を考えていたと思われる。
- 11) 樺山義雄（1942）「思ひ出すまゝ」，『テニスファン』第 10 巻第 10 号，52 頁。
- 12) 樺山義雄の大日本体育会での役職名に関しては，職能資格としては「参事」であったが，役職としては「総務部副部長」であった。「防空空地に関する座談会」，『公園緑地』第 7 巻第 4 号，1943 年 4 月，14 頁より
- 13) 前掲 5)，2 頁。
- 14) 同上。
- 15) 後藤光将（2009）「テニス用語の邦語化に関する研究」，『明治大学教養論集』440 号，2 頁。
- 16) 針重敬喜（1943）「最後の辭」，『日本庭球』第 2 巻第 11 号，2 頁。

（ごとう・みつまさ 政治経済学部准教授）